

本田 伸著

『シリーズ藩物語 八戸藩』

蔦谷 大輔

本書は、『青森県史』や『新編八戸市史』『新編弘前市史 岩木地区』の編さんに関わった本田伸氏による八戸藩の通史本である。著者は平成二十年（二〇〇八）に同シリーズの『弘前藩』を刊行しており、それに続く二冊目の著書である。

まず、本書の構成を見てみよう。

プロローグ 八戸藩物語

第一章 八戸藩のはじまり

【1】 八戸藩の成立

【2】 藩政の開始

第二章 領内支配と中期藩政

【1】 八戸南部家の人々

【2】 藩士と江戸勤め

【3】 中期藩政と財政難

第三章 八戸藩の文化と人物

【1】 八戸藩の人々

【2】 安藤昌益の時代

第四章 八戸に生きる人々

【1】 八戸の城下町

【2】 都市と村の生活

【3】 民衆の移動と交流

第五章 文政改革と後期藩政

【1】 文政改革

【2】 北方警備と家格上昇

第六章 八戸藩の幕末維新

【1】 戊辰戦争に揺れる

【2】 明治への移行

【3】 近代化のなかの八戸

エピローグ 八戸藩と地震・津波

本書は、前著『弘前藩』同様に本文下部に内容に関する写真が掲載され、歴史用語の注記も記されており、出版社によるシリーズ編集方針は一貫している。内容については、「八戸が、地域社会や経済活動が継続的かつ連続的に発展してきた土地であること」を強く意識して書かれており（「プロローグ」）、一般読者でも八戸の発展の歴史に興味を惹くようなエピソードを取りあげている。加えて、『青森県史』や『新編八戸市史』等の最新の研究成果を反映し、資料に即した記述を貫いていることから、八戸藩の歴史を研究する入門書としても役立つ一冊である。それでは、各章の主な内容を簡単に紹介しよう。

第一章は、八戸藩の成立をめぐる動向と領内行政区分の整備について取りあげている。盛岡藩との藩境交渉についても触れており、馬淵川の

川筋の変化が原因で揉めることもあったという（「こじれた藩境問題」）。

第二章は、初代藩主南部直房から六代信依までの藩主の人物像、そして藩政、江戸勤役、財政等を扱っている。立藩にあたって盛岡藩から藩士が分け与えられたり（「家臣団の形成」）、当初は国元と江戸との飛脚は盛岡藩の飛脚に頼っていたりと（「飛脚が走る」）、立藩当初は盛岡藩の支援を受けながら藩体制を整えていったことや、平地が少なくヤマセの影響から稲作よりも畑作を重視して金納を認める金目制を導入したと（「八戸藩の生産力と税制」）、藩の支出を商人に肩代わりさせる勝手仕送り制を導入したが、藩の借金は膨らむ一方であったこと（「藩財政は借金体質」）、などを紹介している。

第三章は、八戸藩に伝わる信仰・芸能・学問などの文化について取りあげている。櫛引八幡宮に伝わる信仰や文化財について（「南部一ノ宮」の大鎧）、八戸に広まった異なる個性を持つ仏像について（「奇峰学秀と津要玄梁」）、俳諧のみならず書画や絵図なども作成した三峰館寛兆について（「俳句文化の広がり」）、八戸に和算を伝えた真法恵賢（「八戸の和算と真法恵賢」）や、平田国学に入門した人々による学問的な交流（「書物仲間の結成」）、などについて取りあげている。なかでも安藤昌益については、藩日記等に見える昌益の動向（「安藤昌益の人物像」）や昌益の著作物の伝来（「刊本『自然真営道』の発見」ほか）と、それに見える昌益の直耕論について（「法世と自然世」ほか）、など詳細に取りあげている。

第四章は、藩内の都市や村に住む人々の生活や、人々の交流について取りあげている。八戸市の中心街に現在も残されている藩政時代の町割

りには、市日にちなむ町名が多く見られるが、それは八戸城下の繁栄と発展の願いが込められていたようである（「城下と町割り」）。また、藩士遠山家が書き記した一〇九冊の「遠山家日記」から、知行地経営や江戸詰め生活など藩士生活に関するエピソードを紹介している（「ある藩士の記録」ほか）。八戸の祭礼として「三社大祭」と「えんぶり」を取りあげて、南部地方特有の祭礼の様子と（「祭礼に見る八戸①」ほか）、農業改良、漁業、鉱業など藩内の各産業について取りあげている（「淵沢田右衛門の挑戦」ほか）。【3】では、東北周遊の旅に出た落語家滑稽屋語仏の旅行記をもとに、八戸の人々との交流について取りあげているとともに（「ある落語家の来訪」ほか）、大岡長兵衛が記した『多志南美草』から幕末情勢に対する八戸の人々の認識について取りあげている（「大岡長兵衛の幕末」）。

第五章は、野村武一による文政改革と、北方警備と家格上昇の動向について取りあげている。文政改革は、藩による国産物買い上げと江戸での販売を核とした経済政策だったこと（「野村武一の登場」ほか）、国産物買い上げで躍進したのは鉄山経営等で成功した西町屋だったこと（「御調役所の設置」ほか）、文政改革は成功し藩財政は潤ったが、農業政策は置き去りにされていたため、天保五年（一八三四）に「稗三合一揆」が起こったこと（「稗三合一揆」と民衆）、などが紹介されている。また、十八世紀末にロシアの接近に伴って北方情勢が緊迫したが、文政八年に八戸藩の沖合に異国船が渡来し、大筒や鉄砲を打ちかけて追い払ったことを紹介しており（「八戸藩の海防体制」）、異国船打払令発布後の対応例として興味深い。そして、表高二万石の八戸藩は城を持って

いなかったが、幕府への働きかけで城主格に昇進したこと（「八戸城主」請願運動）、薩摩藩主島津家から婿養子として迎えられた十代藩主信順は、二万石の大名としては破格の侍従に昇進したこと（島津家から来た婿養子）ほか）、などが取りあげられている。大身大名との結びつきが家格にも影響していたことがよくわかる。

第六章は幕末維新期の八戸藩の動向と、近代の八戸の様子について取りあげている。具体的には、戊辰戦争において、幕府や朝廷との板挟みで東北諸藩は身の処し方に苦しんだこと（「異なる出兵命令」ほか）、盛岡藩との歩調を合わせつつ情勢を捉えて独自の行動をとっていたこと（「同盟の動揺」ほか）、明治二年（一八六九）に、旧幕府脱走艦に乗り組んでいたフランス人に対し八戸藩公用人太田喜満多が石炭を売り払い、その件で新政府に問いただされたこと（「フランス人へ石炭売却」、廃藩置県により八戸県、合併により青森県が誕生したこと（「廃藩置県と青森県の誕生」、などが取りあげられている。

なお、本章には廃藩置県以後の八戸についても取りあげられている。明治初期にキリスト教が黙認されると八戸でハリストス正教会の宣教が始まったこと（源晟と八戸のハリストス正教会）、東洋捕鯨会社の経営に対する周辺漁民の不満によって会社が焼き打ちにされた事件（「全国に伝わった東洋捕鯨会社焼き打ち事件」、港湾施設の整備により日本有数の水揚げ量を誇る八戸港が築かれたこと（「漁業の近代化と八戸港の発展」、などを取りあげている。このように、近代の歴史まで扱ったのは、「震災の記憶を留めるためのエピソードを用意したことで、近代以降の八戸の発展と港湾整備に少なからず触れる必要が生じた」（あとが

き）ためであるという。したがって、エピソードにおける八戸の地震・津波災害とその復興への強い意思を理解するための土台としてこれらの内容が位置づけられているのである。

このように、本書の内容は八戸藩の歴史のみならず、八戸が直面した災害に対しても目が行き届くような内容になっている。著者がこの内容にしたのは、東日本大震災を経験したことがきっかけであるという（あとがき）。著者は故郷の八戸が震災で壊された様子を目の当たりにしたことで、震災と向き合い、復興していく姿を記憶していくことの必要性にかられたのである。

ヤマセが吹き農業生産性が低い地域という逆境を、海とのかかわりを通じて乗り越え発展した八戸藩と、東日本大震災を乗り越え復興を目指す人々の姿は重なるように思われる。本書は、八戸藩の歴史のみならず、様々な逆境を乗り越えていった人々の姿をも学べる本であるといえよう。その意味において本書は是非多くの人に読んでいただきたい。評者の勘違いや間違いがあるかもしれないがご寛恕いただきたい。

（A5判、二〇八頁、現代書館出版、二〇一八年二月刊行、価格一六〇〇円＋税）

（つたや・だいすけ 青森県立鯨ヶ沢高等学校臨時講師）